

諸国奇談 東遊記 一一

(渡辺慶一氏収集文書) 公文書センター所蔵

名立崩 くずれ

越後国糸魚川と直江津との間に名立といふ驛えきあり。上名立、下名立と二つに分れ家數も多く家建も大にして此辺にては繁昌はんじょうの所なり。上下ともに南に山を負ひて北海に臨のぞみたる地なり。然るに今年より三十七年以前に上名立のうしろの山二つにわかれて海中に崩れ入り、一驛の人馬鶏犬ことごとく海底ぼつにゆうに没入す。其われたる山の跡、今にも草木無く真白にして壁のごとく立り。余も此度下名立に一宿して所の人に其有りし事どもを尋るに皆々舌をふるはしていへるは、名立の驛は海辺の事なれば惣じて漁獵を家業とするに、其夜は風静にして天気殊ことによろしくありしかば一驛の者ども夕暮より船を催もよほして鱒鰈たらかれいの類を釣つりに出たり。鰈の類は沖とをくて釣ることなれば名立を離るゝ事八里も十里も出て皆々釣り居たるに、ふと地方じかた(陸の方)の空を顧みかへれば名立の方角と見へて一面に赤くなり夥敷おびただしき火事と見ゆ。皆々大に驚き、すわや我家の焼やけうせぬらん、一刻も早く帰るへしといふより、各我われ一と舟を早めて家に帰りたるに、陸くわには何のかはらしたることもなし。此近きあたりに火事ありしやと問へど、さらに其事ことなしといふ。みなくあやしみながら、まづ目出めでたしなどいひつゝ囲炉裏いろりの側かたわらに茶などのみて居たりに、時刻はやうく夜半過る頃なりしが、いずくともなく只一つ大なる鉄砲を打たるいづく音聞えしに、其跡あとはいかなりしや知るものなし。其時うしろの二ふたつにわかれて海に沈しずみしつゝおもむる。上名立の家は一軒も残らず、老少男女

牛馬鶏犬までも海中のみくづとなりしに、其中に只一人ある家の女房木の枝にかかりながら波の上に浮みて命たすかりぬ。ありしこと共、皆此女の物語にて、鉄砲のごとき音せしまでは覚え居しが、其跡は只夢中のごとくにて海に沈し事もしらざりしとぞ。誠に不思議なるは初の火事のごとく赤くみえしことなり。それゆえに一驛の者ども残らず帰り集りて死失せし也。もし此事無くば、男子たる者は大かた釣りに出たりしことなれば活残るべきに、一つ所に集めて後、崩れたりしは誠に因果とやいふべき。あわれなること也と語れり。余其後、人に聞に、大地震すべき地は遠方より見れば赤氣立のぼりて火事のごとくなるもの也と云へり。松前の津波の時、雲中に仏神飛行し給ひしなるといふことも、此たぐひなるべしや。

此名立の驛は、古人佐渡へ渡り給ひし時、一宿し給ひし所なりとぞ。神主竹内太夫といふ者の家に古き短冊を所持せりといふ。其哥に

都をばさすらへ出て今宵しもうきに名立の月を見る哉

是は菊亭大納言為兼卿、佐渡配流の時、此驛にてよめる和哥なりといふ。

或説に順徳院の御製とも云。余は其短冊みざりしかば、いずれともしらず。

されど哥の体、臣下たる人の作にもやと思はる。又名立の次に長濱といふ濱有り。「黄昏に往来の人の跡絶えて道はかどらぬ越の長濱」などいへる古哥もありと聞り。誠に此あたりは都遠く、よろづ心細き土地なりき。